鷹島町文化財調査報告書　第５集

鷹島海底遺跡Ⅵ

―鷹島海底遺跡内容確認発掘調査報告書２―

2002

長崎県鷹島町教育委員会

鷹島町文化財調査報告書　第５集

鷹島海底遺跡Ⅵ

―鷹島海底遺跡内容確認発掘調査報告書２―

２００２

長崎県鷹島町教育委員会

矢束（左が先端部）

後ろからとらえた矢柄の断面

序　　文

鷹島は伊万里湾口に横たわる風光明媚な島で、豊かな歴史と自然が残されております。島の生業は半農半漁でありますが、近年は特にふぐの養殖で全国にその名が知られるようになりました。鷹島は二度にわたり元軍との戦場になりました。第２次遠征の弘安の役では元軍の多くの船が暴風により伊万里湾で沈没したといわれています。鷹島に残った元軍との激しい戦闘も行なわれ、歴史の舞台となった島であります。島内にはその歴史を物語る多くの遺跡も散在しおり、これらを後世に伝えていくことも現代に生きる我々の重要な務めであります。

鷹島は元寇を海底から明らかにするため昭和55年から海底調査が行なわれ、伊万里湾に面した島の南岸周辺の海底調査で多くの元寇関係遺物が発見されました。これにより昭和57年７月には鷹島の南岸約15万㎡の海域が「鷹島海底遺跡」として指定されました。鷹島海底遺跡は東アジア中世史のなかで元寇という重大な出来事を水中考古学で解明すべく重要な手がかりを提供しています。

鷹島町教育委員会では平成12年から国の補助を受け、神崎港で鷹島海底遺跡内容確認発掘調査を実施してきました。本書は平成13年度に行なったトレンチ発掘調査の成果を報告するものです。本調査では矢束などが見つかっており、元寇関係遺物が豊富に包蔵している重要な場所であるといえます。

本書が海底の埋蔵文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、調査から本書の刊行にいたるまで九州・沖縄水中考古学協会をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力を頂きましたことに心から感謝の意を表します。

平成14年３月31日

鷹島町教育委員会
教育長　小　田　嘉　和

例　　　言

1．本書は、鷹島町教育委員会が平成13年８月１日～８月10日にかけて実施した鷹島海底遺跡神崎港地区の内容確認のための発掘調査の報告書である。

2．本書で使用した遺構実測図は小川光彦が作成した。また、製図には林田憲三、小川光彦、靍井香織、内田比加里があたった。

3．本書で使用した調査および遺物の海底出土状況の写真は林田、山本祐司、石本清が撮影した。

4．本書で使用した遺物の写真は林田、小川光彦、松尾昭子が撮影した。

5．本書で使用した方位はすべて真北である。

6．本書にかかわる遺物および記録類の整理には小川光彦、松尾昭子、靍井香織、内田比加里があたった。

7．本書のFig. 1　鷹島海底遺跡と調査地点位置図は海上保安庁水路部が作成した海図（第166号）を使用した。

8．矢束のエックス線断層写真の撮影には福岡市埋蔵文化財センターの塩屋勝利氏、比佐陽一郎氏、片多雅樹氏の協力を得た。

9．本書にかかわる遺物および記録類は鷹島町埋蔵文化財センターで収蔵、保管、公開される予定である。

10．本書の編集、執筆は松尾昭子の協力を得て林田があたった。

目　　　次

第Ⅰ章　調査の概要

１．調査に至る経緯……………………………………………………………………………1

２．調査の組織…………………………………………………………………………………5

３．遺跡の立地…………………………………………………………………………………7

４．調査の目的…………………………………………………………………………………7

第Ⅱ章　調査の記録

１．発掘調査の概要……………………………………………………………………………9

２．発掘調査方法………………………………………………………………………………10

第Ⅲ章　発掘調査の成果

１．遺物の出土状況……………………………………………………………………………11

２．出土遺物……………………………………………………………………………………11

第Ⅳ章　まとめ…………………………………………………………………………………21

　　　英文サマリー……………………………………………………………………………22

挿　図　目　次

Fig. 1　鷹島海底遺跡と調査地点位置図（1/50,000）……………………………………2

Fig. 2　鷹島海底遺跡調査地点分布図（1/25,000）……………………………折込３～４

Fig. 3　調査地点位置図（1/1,000）……………………………………………………6

Fig. 4　遺物出土位置および北壁土層断面図（1/80）…………………………………12

図　版　目　次

PL. 1　発掘調査地点を示す東西のブイ………………………………………………………8

PL. 2　海底に設定したトレンチの現況………………………………………………………9

PL. 3　発掘の事前打合せ風景と調査船………………………………………………………13

PL. 4　調査地点へ向けて潜水開始風景………………………………………………………14

PL. 5　トレンチの発掘風景……………………………………………………………………14

PL. 6　トレンチ東側の３層上面の検出状況…………………………………………………15

PL. 7　トレンチ北壁土層断面…………………………………………………………………15

PL. 8　トレンチ北壁の１層土壌採取風景……………………………………………………16

PL. 9　海底へ調査船を使ってレベルの移動風景 ……16
PL. 10　３層上面出土遺物の位置の計測風景 ……17
PL. 11　ドレッジ本体と接合された吸引ホース ……17
PL. 12　褐釉壷片（No. 1）の出土状況……18
PL. 13　褐釉壷片（No. 2）の出土状況……18
PL. 14　近世蛸壷（No. 3）の出土状況……18
PL. 15　褐釉壷片（No. 4）の出土状況……18
PL. 16　龍泉窯系青磁碗片（No. 5）の出土状況……18
PL. 17　褐釉壷片（No. 6）の出土状況……18
PL. 18　褐釉四耳壷（No. 7）の出土状況……19
PL. 19　矢束（No. 8）の出土状況……19
PL. 20　褐釉壷片（No. 1）……19
PL. 21　褐釉壷片（No. 2）……19
PL. 22　近世蛸壷（No. 3）……19
PL. 23　褐釉壷片（No. 4）……19
PL. 24　龍泉窯系青磁碗片（No. 5）……20
PL. 25　褐釉壷片（No. 6）……20
PL. 26　褐釉四耳壷（No. 7）……20
PL. 27　矢束（No. 8）……20
PL. 28　矢束（No. 8）のエックス線写真による先端部の映像……20
PL. 29　矢束（No. 8）のエックス線写真による矢柄の映像……20

第Ⅰ章　調査の概要

1．調査に至る経緯（Fig. 1）

鷹島海底遺跡では元寇関係遺物を確認するため、発掘を伴わない目視による潜水調査が平成４年（1992）～平成11年（1999）迄７年間行なわれた。この潜水調査は海底に遺構、遺物の有無およびそれらの分布範囲を把握するためのものであった。しかし、平成12年度（2000）からは潜水調査に変わり、海底に２m×10mのトレンチを設定して発掘調査を行っている。今回の発掘調査地点は平成12年度に行なった神崎(こうざき)港改修工事に伴う緊急調査区域に接し、その位置は僅かに北側に隔たった地点である。

鷹島海底遺跡とは昭和56年(1981) ７月に周知の遺跡として定められ、鷹島南岸の東端にある干上鼻(ひあがりのはな)から西端の雷　岬(いかずきみさき)まで約7.5㎞、汀線より沖合200mまでの範囲に含まれる約150万m^2の海域をさす。この鷹島海底遺跡ではこれまで２度にわたって文部省科学研究費による学術調査が行われている。第１回は昭和55～57年（1980～82）に行なわれ、その研究課題は「水中考古学に関する基礎的研究」であった。第２回は平成元～２年（1989～91）にかけて行なわれた「鷹島海底における元寇関係遺跡の調査・研究・保存方法に関する基礎的研究」であった。これ以外に長崎県教育庁学芸文化課及び鷹島町教育委員会による緊急調査がこれ迄10回行なわれ、そのうち、発掘を伴う調査が７回行われている。最初の発掘調査は鷹島海底遺跡の西側海域に位置した床浪港で昭和58年（1983）７～９月かけて行なわれた。これは港の改修工事に伴う発掘調査であった。床浪港の調査は引き続き平成元年（1989）６～８月、平成４年（1992）７～９月に行なわれた。その後、緊急発掘調査は遺跡の東側海域にあたる神崎港に移った。ここの調査も床浪港と同様に港の改修工事に伴う発掘調査である。神崎港の緊急調査は平成６年(1994) 11～12月に始めて行われ、引き続き平成７年(1995) ７～９月、平成12年(2000) ９月～11月、平成13年（2001）８月～10月に行なわれている。

鷹島海底遺跡で行なわれたこれまでの学術調査や緊急発掘調査及び九州・沖縄水中考古学協会による９次にわたる潜水調査で元寇関係遺物を数多く確認している。大量に出土している中国陶器を含む磁器、鉄刀、船釘、銅碗、青銅製品、石弾、石臼、片口乳鉢、磚、碇石、木製碇、木製品、竹製品、鉄製品等があり、これらの出土遺物以外にも、縄文土器、近世陶器、肥前磁器、人骨及び獣魚骨等がある。また、その数は少ないが銅鏡や高麗製品も出土している。平成６年（1994）の神崎港の緊急発掘調査では、２個の碇石が対になった木製碇が海底面より１m下がったシルト層で元位置を保った状態で検出され、元軍船の碇の基本的な構造が明らかとなるばかりではなく、元寇当時の海底面が想定できる成果をあげている。元軍船の部材については平成12年度及び13年度の緊急発掘調査で多くの成果をあげた。特に平成13年度の調査では元軍の沈没船の存在が想定できる船のマストを支える台座や遺存状態の良好な外板などが出土している。一部の部材には二次焼成を受けたことを裏付ける炭化現象が見られる。さらに武器類としては刀、矢（箭(や)）束、「てつはう」などがある。これらの出土遺物以外にも銅銭、銅匙、鹿の角を利用した柄、青銅製帯金具、朱色の彩色を施した皮鎧の小札などがある。さらに、大量の中国陶器に混じって鈞窯鉢が少なくとも２個体以上出土している。宋代の窯で焼

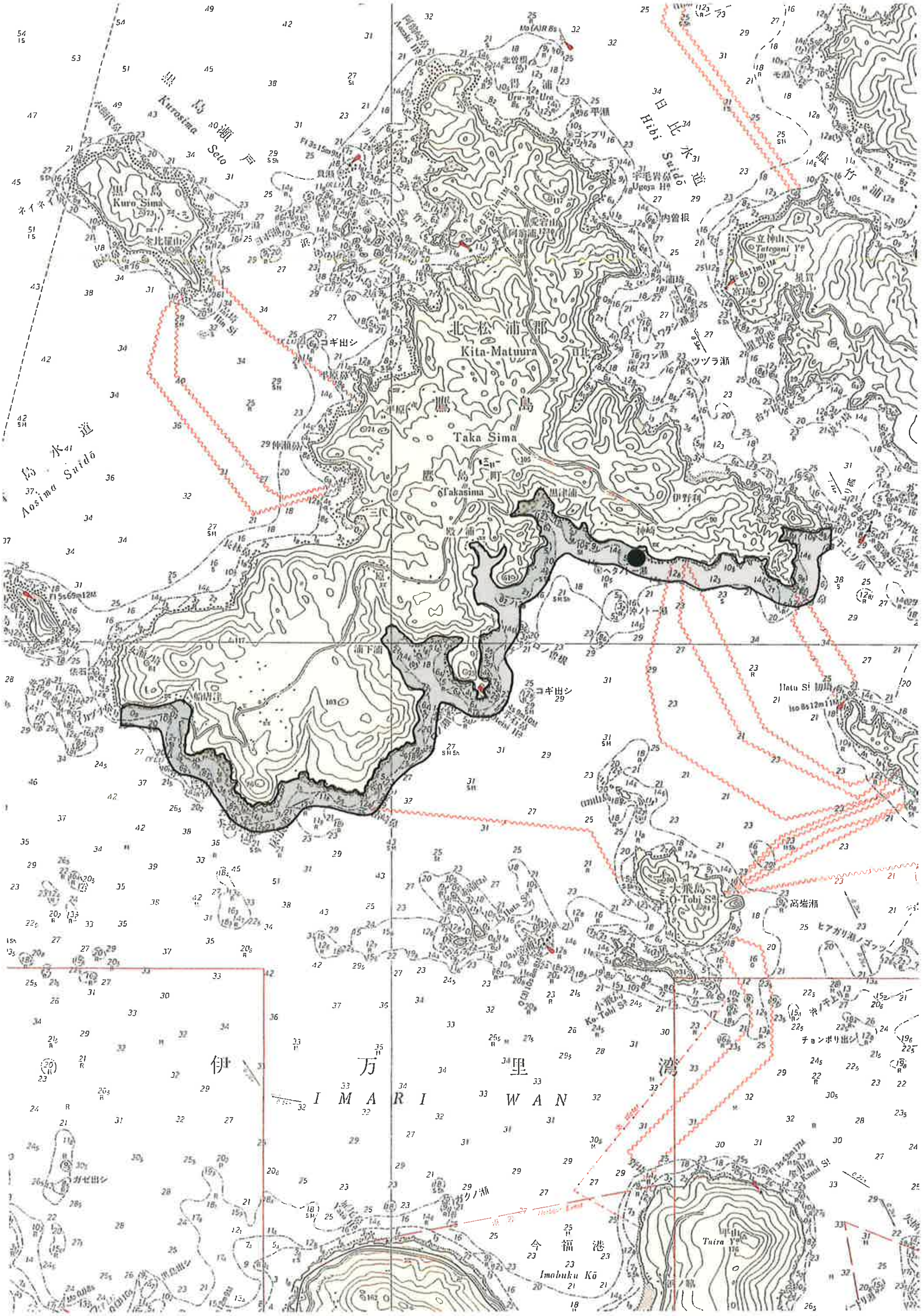


Fig. 1　鷹島海底遺跡と調査地点位置図（1/50,000）

Fig. 2　鷹島海底遺跡調査地点分布図（1/25,000）

かれた鈞窯の製品は鷹島海底遺跡で初めての出土例である。さらに、人骨の頭部片も出土している。元軍船の部材とその積載品は以前にこの港でパスパ文字の印面を持った「管軍総把印」が採集されていることも考慮すれば、今回出土したその意義は大きいといえる。

九州・沖縄水中考古学協会による鷹島海底遺跡への調査協力は平成元年（1989）の床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査以来、平成4年（1992）の床浪港緊急発掘調査と続き、この調査では縄文早期の包含層を標高－25m～－26mで確認している。この成果は世界的にも鷹島海底遺跡の重要性を喚起したことは言うまでもない。更に平成6年（1994）から始まった神崎港沖の緊急発掘調査にも協力をし、平成7年（1995）、平成12年（2000）、平成13年（2001）の調査と続いている。さらに、協会は平成4年（1992）から目視による潜水調査として「鷹島海底遺跡詳細分布調査」を実施している。元寇関係遺物の分布調査を平成4年（1992）から平成11年（1999）まで毎年行なってきた。平成12年度からは発掘を伴うトレンチ調査を実施し、今年度は第2回の発掘調査を神崎港沖の水深約10mの海底で行った。

本書は九州・沖縄水中考古学協会が行なった発掘調査の成果を鷹島町に提出した「鷹島海底遺跡発掘調査報告書XI」—神崎地区第10次調査—としてまとめた報告書に基づいて作成されたものである。

2．調査の組織

発掘調査は協会が鷹島町より依頼を受けて、長崎県北松浦郡鷹島町神崎地区地先公有水面の海底で行ったものである。調査の目的はトレンチの発掘調査により元寇関係の遺構や遺物の有無を確認し、記録するためである。発掘調査は九州・沖縄水中考古学協会員と協会賛助会員の国富株式会社長崎営業所の潜水士で構成された総数16名で行った。発掘調査は平成13年（2001）8月1日（水曜日）から8月10日（金曜日）の10日間行なった。今回も鷹島町、鷹島町教育委員会、鷹島町埋蔵文化財センター、神崎地区の人々の協力を得て無事に調査を終了することができた。調査に参加した会員および潜水士は以下の通りである。

林田憲三	福岡市教育委員会、九州・沖縄水中考古学協会長
石原　渉	（財）日本習字教育財団、九州・沖縄水中考古学協会副会長
高野晋司	長崎県壱岐・原の辻遺跡調査事務所長、九州・沖縄水中考古学協会運営員運営委員
加藤隆也	福岡市博物館学芸課、九州・沖縄水中考古学協会運営員運営委員
小川光彦	琉球大学大学院人文社会科学研究科、九州・沖縄水中考古学協会運営委員
横田　浩	九州・沖縄水中考古学協会運営委員
山本祐司	九州・沖縄水中考古学協会運営委員、水中写真家
本田浩二郎	福岡市教育委員会埋蔵文化財課、九州・沖縄水中考古学協会会員
石川満万	九州・沖縄水中考古学協会会員
杉崎彩子	東海大学海洋学部、九州・沖縄水中考古学協会会員
木村　淳	東海大学文学部考古学専攻、九州・沖縄水中考古学協会会員
中村俊介	朝日新聞西部本社学芸部、九州・沖縄水中考古学協会会員

小野田康久　国富株式会社長崎営業所所長、九州・沖縄水中考古学協会会員

石本　清　　国富株式会社長崎営業所、潜水士

三浦清文　　国富株式会社長崎営業所、潜水士

松尾昭子　　鷹島町埋蔵文化財センター学芸員、九州・沖縄水中考古学協会会員

調査協力　　鷹島町、鷹島町教育委員会、鷹島町埋蔵文化財センター、高崎　壽、近藤英二、出口義之

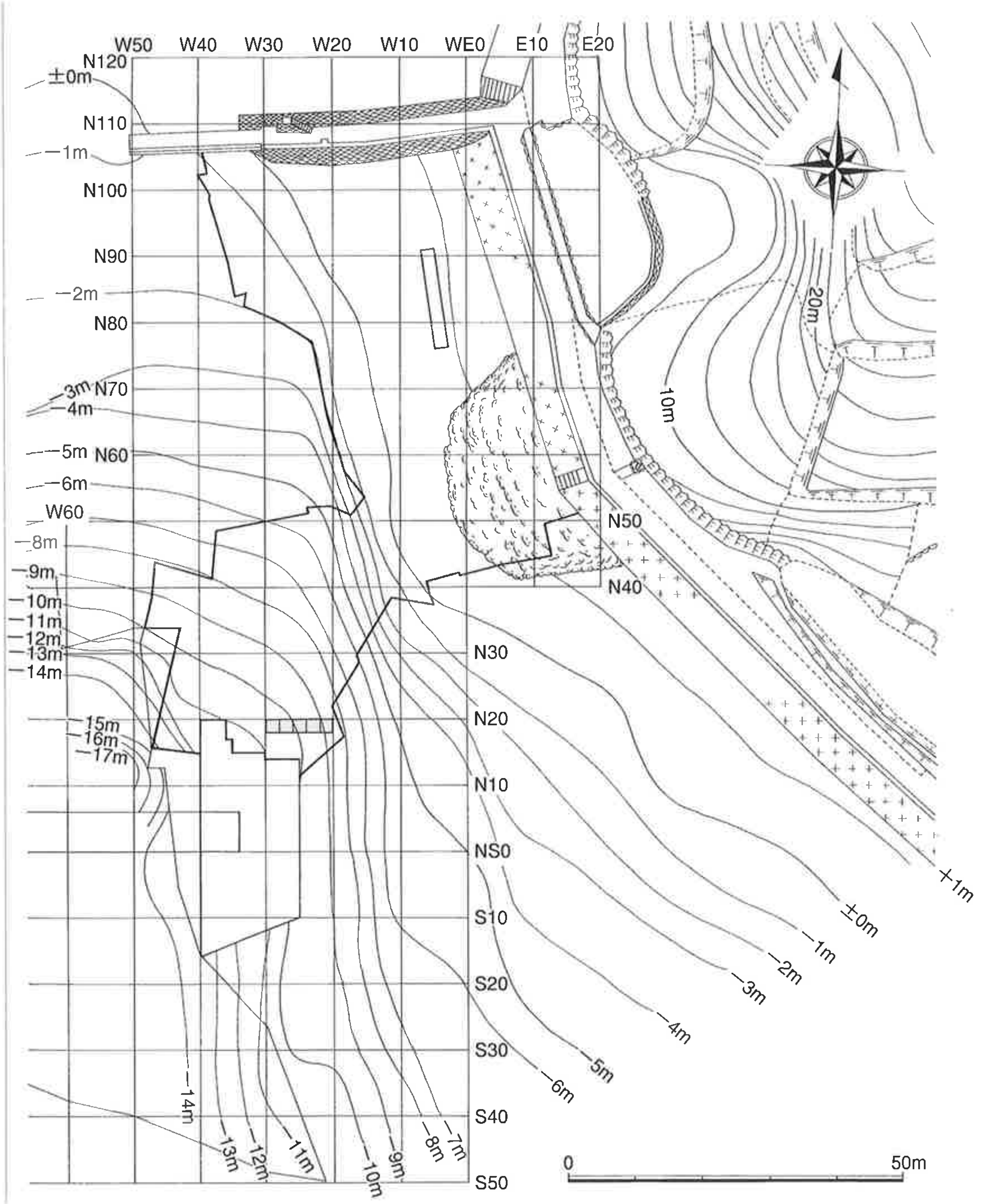


Fig.3　調査地点位置図（1／1,000）

３．遺跡の立地（Fig. 2）

発掘調査地点は長崎県北松浦郡鷹島の南岸7.5㎞におよぶ周知の遺跡として定められた海域にあり、鷹島町神崎地区地先公有水面となっている。今回の調査地点は1992年から連続して1999年まで協会が神崎地区先公有水面で行なってきた潜水調査の最も西寄に近い海域に位置している。また、この調査地点は平成６年（1994）と平成７年（1995）に行われた緊急発掘調査地点の直ぐ東側にある。更に平成12年度の緊急発掘調査地点の北側に隣接した地点でもあり、平成９年（1997）に当協会の行った潜水調査区域内でもある。発掘調査地点は鷹島における第１次の文部省科学研究による調査でも多くの元寇関係の遺物が確認されているために、当初から多くの遺物が発見されるものと考えられた。

発掘調査地点周辺地形の特徴は、神崎港を挟んで二つの丘陵端部があり、その東側に今回の調査地点は位置している。海底は潮間帯付近では小さな礫に覆われているが、西および南の沖側へいくにしたがって水深が増し、－５ｍ付近の海底は大きな礫群の段落ちとなっている。調査地点の海底も西側へ傾斜し、標高は－8.6ｍから－10.25ｍである。底質はシルトとなっている。調査地点周辺は潮間帯が大きく広がり、水深が－1.5ｍ付近までの海底は潮が引くために現在でも元寇関係遺物が簡単に採集できる。発掘調査地点の設定に当たっては陸上に測量可能な条件を持った場所を決定しなければならないため鷹島町教育委員会より神崎港平面図（1/500）の提供を受け、平成６年（1994）と平成７年（1995）に行われた緊急発掘調査で陸上に設置した基準点を採用した。

４．調査の目的

鷹島は弘安４年（1281）の役で戦闘が行なわれ、元軍の数千の船が投錨していた伊万里湾では暴風が原因で多くの船が沈没したといわれている。その歴史の舞台となった鷹島の南岸海域では地元の漁師によって陶磁器を含む多くの元寇関係遺物が引き揚げられているのは周知の事実である。鷹島はアジアの中世史のなかで日本と中国大陸あるいは朝鮮半島との対外交流にどのような影響をもたらしたのか、この歴史上の事件を水中考古学の学問領域で解明すべく重要な手がかりを提供している。

鷹島で起きた歴史的な事件を鷹島海底で証明することの意義は大きい。これ迄、関心が少なかった海の歴史に水中考古学が貢献している。鷹島海底遺跡は印面にパスパ文字で印された「管軍総把印」に代表される元寇関係遺物ばかりではなく、縄文早期の遺物が1992年の床浪港の緊急調査で出土していることはこの鷹島海底遺跡が長期にわたって人間活動の痕跡を積み重ねていることが窺える。

今回行なった発掘調査は鷹島海底遺跡の神崎地区で遺構及び遺物をトレンチ調査によって確認する調査である。この地区では「管軍総把印」が海岸で採集され、さらに1994年の緊急発掘調査で木碇の爪の先端部近くに位置した外側の表面に漢字が刻まれている木碇が浚渫で発見されている。また、この地区では現在でも多量の中国陶磁器が潮間帯や海底で採集することができる。

このような理由から協会は、平成４年（1992）から平成11年（1999）まで潜水調査、平成12年から今回の調査まで発掘調査を神崎地区で実施した。その結果、元寇関係遺物、特に矢束、磚、碇石を確認することができた。また、昭和55年から57年迄の３年間にわたって行なわれた「水中考古学に関する基

礎的研究」はこの神崎地区の海域もその調査対象区域となり、多くの遺物が海底から回収されている。平成６年（1994）と平成７年（1995）の神崎港改修工事に伴う緊急発掘調査では海底下約１ｍで木製碇に装着する二組になった碇石を検出している。今回の発掘調査地点は平成６年・７年の調査区域のすぐ東側に位置しており、平成９年（1997）に協会が行なった潜水調査（鷹島海底遺跡潜水調査報告書Ⅶ－神崎地区－1997）においても碇石、青磁碗、磚などが確認されている。この調査でとくに注目すべき点は採集した碇石が一石型碇石を中央の装着部にある固定溝を境に半折して、二石として碇石に使用したものである。そのため鷹島海底遺跡で数多くみられる二石分離型碇石として分類されるものとは木碇の歴史的変遷で基本的に異なるものである。つまり博多湾を中心に北部九州で数多く発見されている碇石と比較できるものである。鷹島海底遺跡ではこれまで４例（そのうち、２例は対になる碇石）しか存在しない。平成10年（1998）の潜水調査（鷹島海底遺跡潜水調査報告書Ⅷ－神崎地区－1998）では青磁碗、褐釉陶器、四耳壺、甕、磚、肥前系磁器など計19点が確認され、最も元寇関係遺物が集中して確認できる有望な地点である。平成11年(1999)の潜水調査（鷹島海底遺跡潜水調査報告書Ⅸ－神崎地区－1999）でも黒釉碗、褐釉壺、磚、肥前系染付碗等計７点が確認されている。平成12年（2000)、協会による初めての発掘調査(鷹島海底遺跡潜水調査報告書Ⅹ－神崎地区－2000)はこの地区で行われ、幅２ｍ、長さ10ｍの東西に延びるトレンチを設定した。４層の貝殻を多量に含む灰色粗砂層の上面で褐釉壷の胴部片１点、約半分が欠損した磚１点が出土した。それ以外の遺物は周辺の海底で23点の元寇関係遺物を採集している。採集した遺物の内訳は褐釉陶器が２点、磚が21点である。初めて発掘調査を実施したことは周知された鷹島海底遺跡の規模、範囲、性格などを把握し、今後の精密な海底調査を行なう場合の重要な資料を提供している。今回は協会が行なった２度目のトレンチ発掘調査である。これまでの神崎港の調査の成果から沈没船の存在を確かめ得る貴重な機会となった。

PL．１　発掘調査地点を示す東西のブイ

第Ⅱ章　調査の記録

1．発掘調査の概要（PLs. 1・2）

協会は鷹島海底遺跡のトレンチ発掘調査で、元軍の沈没船の船体を確認することをこの調査の目的の一つとして、重要な関心をもっている。そのため、協会の今年度のトレンチ発掘調査地点を鷹島海底遺跡のどの場所に選ぶかは限られた調査期間と狭い調査面積から、候補地を絞り込むことは決して簡単なことではない。神崎港の大型木製碇が出土した地点から真北の方向の陸地に近い地点、木製碇から約80m離れた地点、W140，N30－N40地点の水深が7.5m～9.5mの海底を候補地に選んだ。しかし、この地点は神崎港を利用する漁船が頻繁に利用する航路帯にあるため。安全な調査をと、考えている協会はこの地点を選ぶことは躊躇せざるを得なかった。そのため、安全な調査と成果が期待された地点として、平成11年（2000）の緊急発掘調査地点の北側に今回の調査地点を設定した。

本年度の調査地点として設定したトレンチは基準点のある陸上から南側と西側の沖の海底へ延ばしたW20とW30ラインとN20とN22ラインが交差する4地点で囲まれる区域である。発掘対象面積は幅が2m、長さが10mの20㎡である。発掘調査地点を海底に設定する方法は以下の手順で行なった。

海底で発掘するトレンチの設定は陸上の基準点N20とW30からトランシットにより方向を定め海上にベースラインとなるロープをそれぞれ延ばし、海底面近くにベースラインのロープを固定する。2つのベースラインのロープが交差する地点に錘を用いて交点を潜水士が待機する海底面に下ろし、その地点を基準点A（N20，W30）とする。この地点より南に2m、東へ10mをベースライン上に沿って延ばし、それぞれの地点をN22とW20として、海底にピンポールを用いてさらに3箇所に基準点を設置した。基準点Aを含む4基準点で囲まれる区域が今回発掘するトレンチである。基準点Bは（N

PL. 2　海底に設定したトレンチの現況

20，W20)、基準点Cは（N22，W20)、基準点Dは（N22，W30）となる。基準点Aと基準点Bにはそれぞれ直径が25cmの2個の橙色マーカーブイを海面に揚げる。これらのマーカーブイは他船に調査区であることを周知させ、発掘調査を安全に行なう目的のために調査地点の東端と西端にそれぞれ設置した。因みに、これらのマーカーブイは調査終了後には回収し、調査海域より撤去した。海底の基準点の設置作業は陸上班と調査船に乗った海上班が携帯無線器を使用して、陸上班からの指示を的確に海底作業を行なっている潜水士に伝えながら進めた。

2．発掘調査方法（Fig. 3，PLs. 3 -11）

基準点A、B、C、Dで囲んだ調査区を調査員及び潜水士によって発掘を行なった。調査区はさらに5グリッドに分けることにした。調査区は西側基点W30から東側基点W20までの2m×10mのトレンチを2m×2mの小グリッドにして、それぞれをグリッドA、B、C、D、Eとした。発掘を行なう調査員は潜水士を含めて2班にわけた。それ以外にビデオカメラと水中カメラによる調査を映像で記録する担当者をあてた。

発掘はドレッジを用いて行い、まず第1層のシルト層の除去を行なった。この層はトレンチの東側、グリッドDの一部とグリッドEが含まれるW20～W22.5地点では厚さ約25cmに堆積している。この地点では第2層の砂層が堆積しておらず、第3層である大きな貝殻を大量に含む灰色粗砂層が第1層下に堆積していることが確認できた。また、この地点では3層は浅く堆積しており、この3層の下には基盤の礫層がある。第1層はトレンチの最も深い場所であるW30地点で約40cm堆積している。第2層は小さな貝殻を含む砂層で、W22.5からW30までは東側から西側へと徐々に堆積の厚みが増大する。グリッドAの最深部では50cm以上に堆積している。大形の貝殻を大量に含む灰色粗砂層の上面で元寇関係遺物が出土することはこれまでの平成12年度（2000）の神崎港改修工事に伴う緊急発掘調査および協会による前年度のトレンチ発掘調査でも確認できているため、今回のトレンチ発掘調査も神崎港東側海岸寄り地点の海底土壌の堆積状況をある程度把握することができていた。そのため、層序に沿って発掘をおこなうことができた。海底でドレッジを稼動させて発掘すると、堆積しているシルトや砂が舞い上がり発掘周辺の透視度が急激に悪化する。しかし、そのような発掘環境の中でも元寇関係遺物が出土する鍵となる層が大形の貝殻を大量に含む灰色粗砂層であるため、ドレッジを使用して、周辺海底の視界が極端に低下するなかで、間違いなく鍵となる層を探り、この層の上面にドレッジの吸引口を安定させることができた。

3層上面で検出した8点の遺物は検出状況はカメラによる撮影を行い、遺物の位置、レベルなどの計測を行った後に回収した。3層上面で検出した遺物の中には近世の素焼きの約1/2が残存した蛸壺が1点あり、元寇関係遺物との混在が層のなかで認められる。これも調査地点がより海岸部に近い海底での発掘調査であるため、遺物が波や潮流に影響を受けやすくなると考えられる。1、2層とも比較的やわらかいシルト及び砂層であるため、二つの層では海底面にある遺物が比較的緩やかに沈降していくものと思われる。

第Ⅲ章　発掘調査の成果

1．遺物の出土状況（Fig. 3，PLs. 12-19）

トレンチの3層上面で検出した遺物は合計8点である。その内訳は、元寇関係遺物が7点と近世時期に比定できると思われる蛸壷の破片が1点である。また6点はグリッドBおよびCで検出した。他の2点はそれぞれグリッドAとDで検出している。検出した遺物にはそれぞれNo. 1からNo. 8まで通し番号を付けた。以下遺物番号ごとに出土状況を述べることにする。

No. 1（PL. 12)、これは褐釉壷の胴部破片で、内面を上にして、グリッドDのほぼ中央で出土した。標高は－9.5mを測る。

No. 2（PL. 13)、この胴部破片はグリッドCの中央よりやや西側で検出された褐釉壷の細片である。標高は－10mを僅かに下がった地点である。

No. 3（PL. 14)、これは近世の蛸壷と思われるものである。グリッドCで検出されているが、グリッドBに近い地点でもある。口縁部をやや上に、底部は下方向にして出土している。口縁部から底部まで全体の約1/2が残存している。標高－10mより15cm程下がった地点で出土している。

No. 4（PL. 15)、褐釉部壷の胴部破片である。グリッドBとCが接し中央付近で、内面を上にして検出された。標高は約10.25mを測る。

No. 5（PL. 16)、これは龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。グリッドBの中央から約50cm東側へ寄った地点で検出され、No. 4の褐釉壷片とは約40cmも隔たっていない。口縁部内面を上にして検出された。外面には蓮弁文が認められる。標高は－10.25mより僅かに下がった地点である。

No. 6（PL. 17)、この褐釉壷は口縁部片である。グリッドBの中央から約40cmやや南側に寄った地点で外面を上にして検出された。標高は－10.50mを測る。

No. 7（PL. 18)、これは褐釉四耳壷である。胴部上位が全体の約1/4が欠損するものの、ほぼ完形品といえる。口縁部をやや下向きにして、破損した胴部面を上にした状態でグリッドAのほぼ中央部近くで検出された。壷の内側は貝殻混じりの砂がぎっしり詰まっていた。表面には貝殻も口縁部から胴部上位にかけてやや多く見られる。標高は－11mより僅かに下がった地点で出土している。

No. 8（PL. 19）、これは矢（箭（や））が束になったものである。グリッドBの中央から約50cm北側に寄った地点で検出している。鉄族は錆びていて東側に向いている。標高が－10.50mより極僅かに下がった地点で出土している。

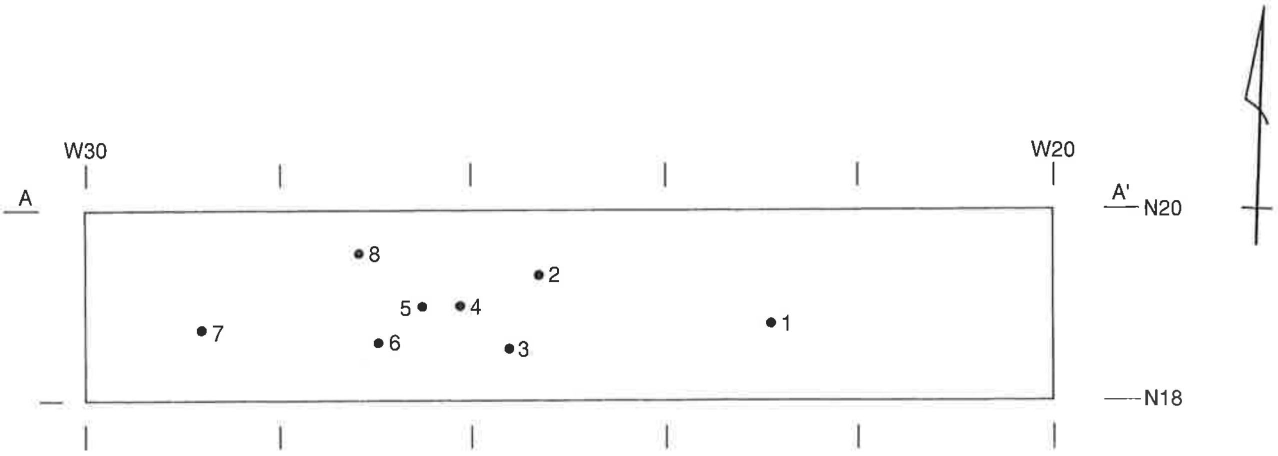
2．出土遺物（PLs. 20-28）

遺物の出土状況に関しては既に述べたので、ここではそれぞれの遺物の特徴や法量等について述べることにする。

No. 1（PL. 20)、この破片は外面に暗褐色を呈した釉薬が施されている陶器の壷で、胴部中位の破片である。内面は灰黒色を帯びていて、釉薬はない。

No. 2 (PL. 21)、この陶器の胴部破片は褐釉壷の細片であるが、表面の釉薬は剥離している。胎土は明褐色を呈する。

No. 3 (PL. 22)、これは近世の蛸壷と思われるものである。外面頸部から胴部には轆轤仕上げによる強い指なでによる右上がりの凹凸が見られる。内面には凹凸は見られない。底部には穿孔が僅かに残存している。復元口径は11.4cm、器高は25.7cmを測る。この蛸壺破片のように3層上面で元寇関係遺物と時代の異なる遺物が共伴することがある。これまで、神崎港で行われた海底調査で時期の新しい遺物がより古いものの下から出土した例があり、海岸部に近い海底の堆積層中で認められる。これは波や潮の動きに影響を受けやすい海岸に近い海底で見られることから、底質がシルト層や砂層の場合、海底の表面にあった遺物は波や潮の運動により時間の経過と共に徐々に海底下に埋没するものと



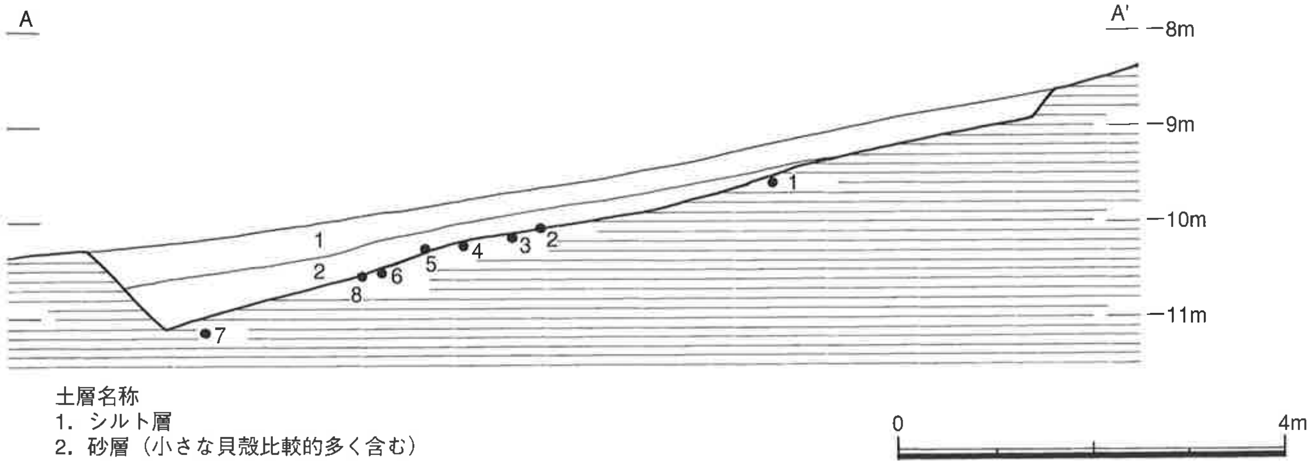


Fig. 4　遺物出土位置および北壁土層断面図（1/80）

考えられる。その結果、層序的に最も新しい硬い堆積層の上面で遺物の埋没の進行が停止するものと言える。この蛸壺破片はその一例で、硬い堆積層である大形の貝殻が大量に混じる砂層の上面で出土するのである。

No. 4 (PL.23)、陶器の胴部破片の外面には黒褐色の釉が施され、内面には釉は認められない。

No. 5 (PL.24)、これは龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。外面には蓮弁文が認められるが、表面の摩滅が著しい。表面に施されている釉は淡灰緑色を呈している。

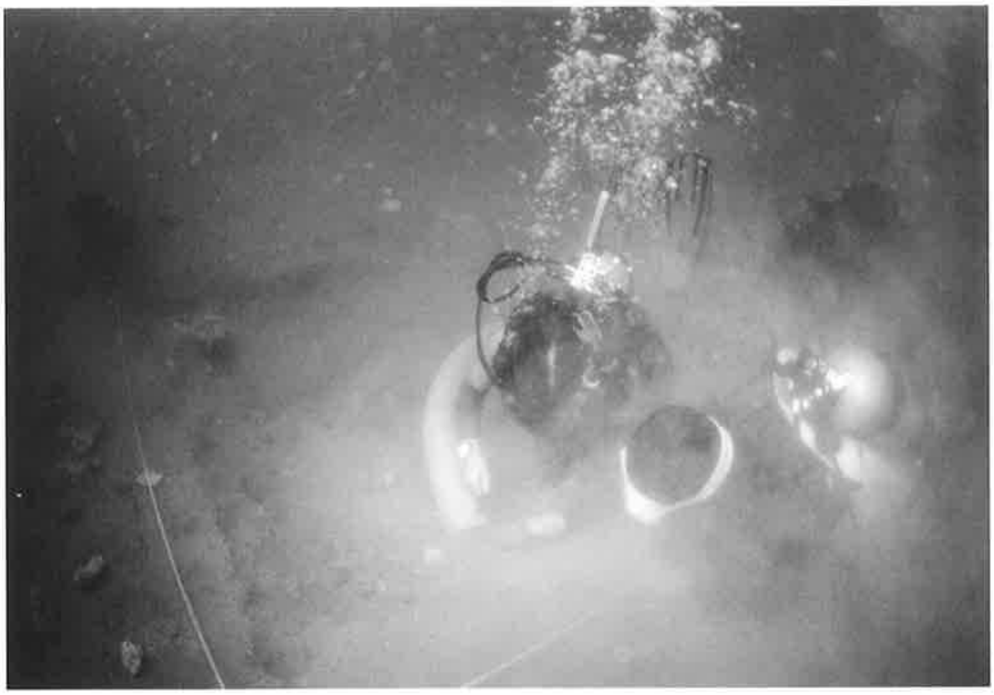
No. 6 (PL.25)、この陶器の口縁部から胴部上位にかけての破片で、表面に施されている釉は暗褐色を呈する。肩部には耳の痕跡はない。

No. 7 (PL.26)、これは陶器で褐釉四耳壷である。残存状態は胴部に約1/4の欠損があるものの良好である。外面の釉薬は殆ど剥離している。胎土は灰色を呈する。肩部には耳が4箇所に貼り付けられているが、耳は2個づつ接近して配置されている。外面胴部下位には左上がりの削りの痕跡がある。外底には重ね焼きをした目痕が見られる。口径は6.8㎝、器高は23.6㎝を測る。

No. 8 (PLs.27-29)、矢（箭（や））が束になったものである。矢全体に錆びが覆って、褐色を呈する。束の断面はかまぼこ状で、矢の上面は弧状となり、下面は比較的平らな面となる。残長は約32㎝、厚みは13.6㎝、幅約19㎝、重さは4540ｇを測る。矢柄は木質で、約70本が残存している。1本の矢の径は8～9㎜を測る。表面観察では内部の状態を判断することはできなかったが、福岡市埋蔵文化財センターの協力を得て、同センターで矢束のレントゲン撮影を撮ることができた。レントゲンの映像から矢の先端の鉄鏃は腐食が激しく、鉄鏃らしきものを漠然と認めるものの、その形を明瞭に留めていないことが判明した。

PL. 3　発掘の事前打合せ風景と調査船

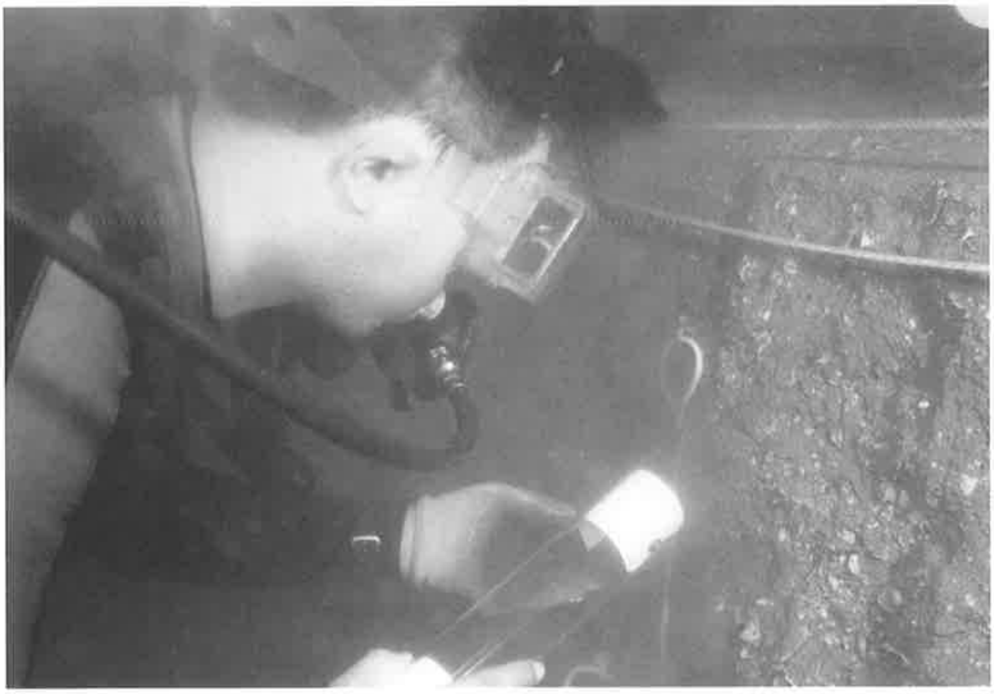
PL. 4　調査地点へ向けて潜水開始風景



PL. 5　トレンチの発掘風景

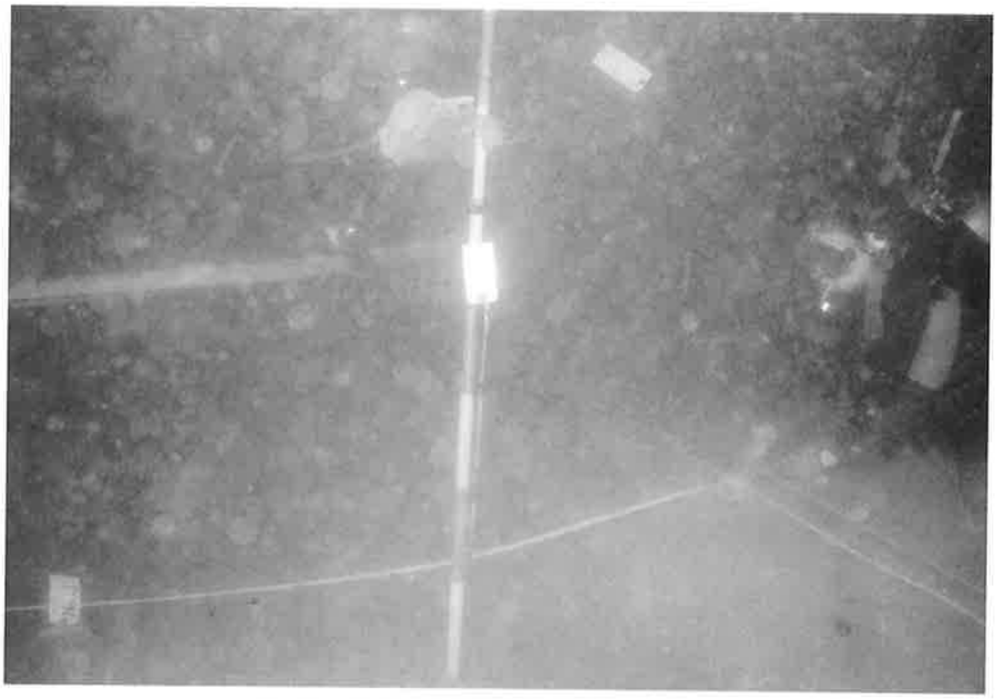
PL. 6　トレンチ東側の３層上面の検出状況

PL. 7　トレンチ北壁土層断面



PL. 8　トレンチ北壁の１層土壌採取風景

PL. 9　海底へ調査船を使ってレベルの移動風景



PL.10　3層上面出土遺物の位置の計測風景

PL.11　ドレッジ本体と接合された吸引ホース

PL.12　褐釉壷片（No. 1）の出土状況

PL.13　褐釉壷片（No. 2）の出土状況

PL.14　近世蛸壷（No. 3）の出土状況

PL.15　褐釉壷片（No. 4）の出土状況

PL.16　龍泉窯系青磁碗片（No. 5）の出土状況

PL.17　褐釉壷片（No. 6）の出土状況

PL. 18　褐釉四耳壷（No. 7）の出土状況

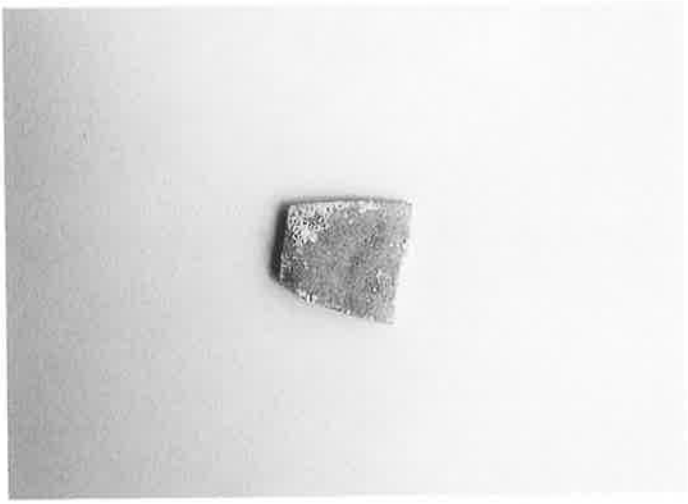
PL. 19　矢束（No. 8）の出土状況

PL. 20　褐釉壷片（No. 1）

PL. 21　褐釉壷片（No. 2）

PL. 22　近世蛸壷（No. 3）

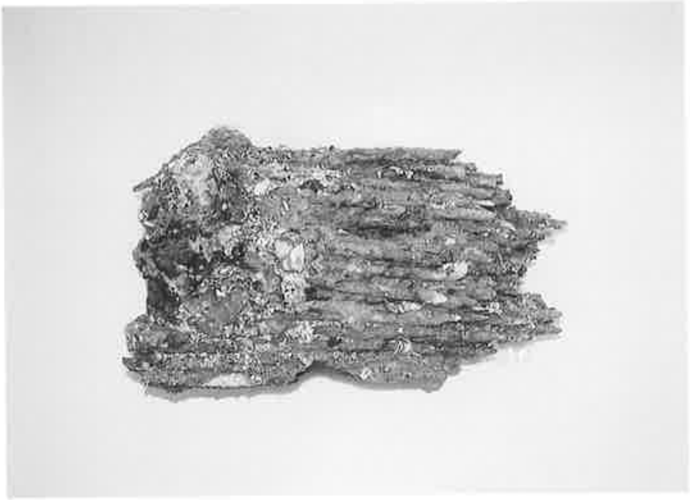
PL. 23　褐釉壷片（No. 4）



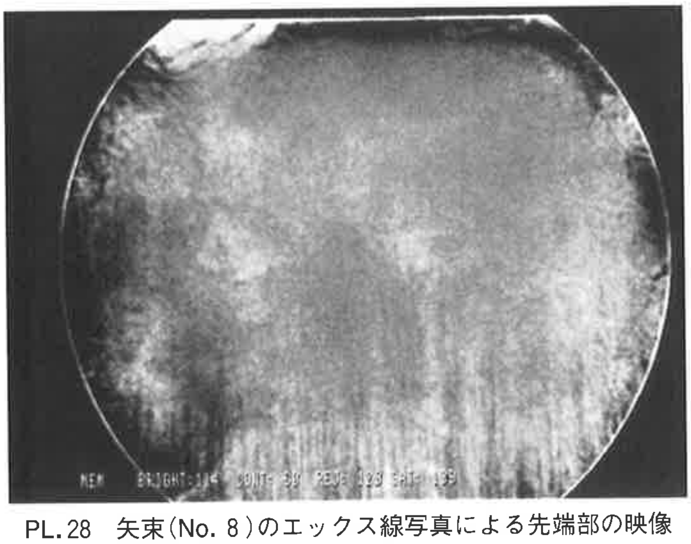
PL. 24　龍泉窯系青磁碗片（No. 5）

PL. 25　褐釉壺片（No. 6）

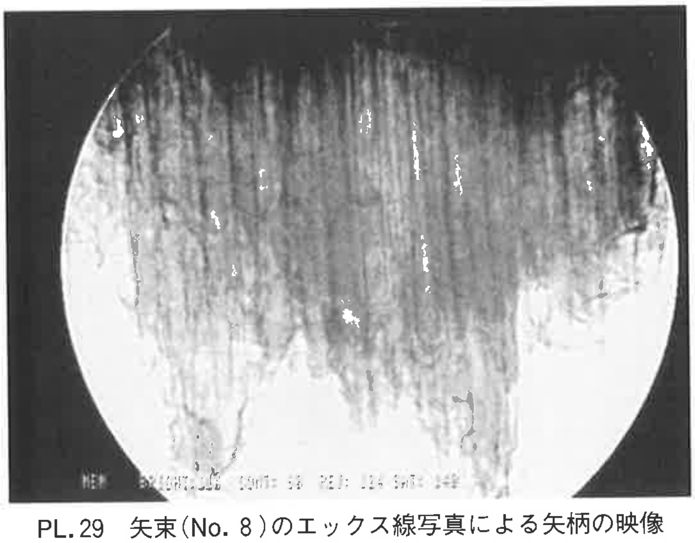
PL. 26　褐釉四耳壺（No. 7）



PL. 27　矢束（No. 8）



PL. 28　矢束（No. 8）のエックス線写真による先端部の映像



PL. 29　矢束（No. 8）のエックス線写真による矢柄の映像

第Ⅳ章　ま　と　め

神崎港の発掘調査は10日間の日程と２m×10mの調査面積のトレンチ調査であった。日程と面積からして多くの成果を求めることは困難である。しかし、３層上面で８点の遺物を検出した。そのうち、１点は元寇関係遺物ではないが、他の７点は青磁が１点、陶器が５点、武器が１点であった。特に今回の調査で出土した矢は昨年の緊急発掘調査で出土例があるものの、70本程の矢が束となって、錆びて固まった状態で出土している。その後、エックス線撮影をおこなったが、矢の先端部の鉄鏃はその形の映像が明瞭に認められず、錆びが著しく進行していることが窺える。矢柄は木質であることが確認できる。表面を覆った錆びがさらに内部の鉄に大きく影響を与え、殆ど、鉄が消失していることが判明した。

昨年に続く発掘調査を行い、神崎港海底の堆積層の層序が把握できたことはこれからの神崎地区での調査に有効且つ貴重な資料である。堆積層で注目すべき層は第３層である。この層が元寇関係遺物を包含する層である。この層の特徴は灰色粗砂層で大形の貝殻を多量に含んでいることである。そのために、この層は比較的締まりのある硬い砂層である。この砂層の上面か上面よりやや下がった地点で元寇関係遺物が出土することがこれまでの調査で確認されている。

神崎港は平成６年（1994）の緊急発掘調査で出土した大型の碇とそれに伴う二石分離型の碇石、昭和49年（1974）に神崎港海岸で採集された管軍総把印がある。この青銅印は南宋軍の100～500人の兵卒を指揮下に置く中隊長クラスが所有したものである。総把がどのような部隊を率いたのか神崎港のこれまでの調査で出土した遺物を詳細に調べると何らかの手がかりが掴めるものと思われる。元軍の部隊としては水夫を含む戦闘部隊（騎馬隊、砲手隊、弓矢隊など）、飲料水を含む食料調達部隊、上陸後屯営を行なう部隊なども総把に委任されることがあった。海底出土の遺物がこれらの部隊と何らかの関係を結び得るものがあるとするならば、どのように関連付けすることが可能なのか考えてみたい。

神崎港で最も多く出土する遺物は容器としての機能をもつ褐釉陶器壷がある。これは容積が大きくなく、固形物や液体のどちらの用途にも使える多目的な容器である。白磁碗や青磁碗、天目碗、鈞窯鉢などは全体的に出土量は少ない。特に後者の二種類は現在まで数点しか出土しておらず、極端に少ない。天目茶碗は茶を嗜むための容器である。更に、高麗青磁など朝鮮半島系は東路軍に所属すると考えられる遺物であるが、これも極端に少ない。但し、平成12年（2000）に朝鮮半島を起源にすると思われる船の部材が出土していることから朝鮮半島系の遺物が東路軍の船に積み込まれていたと考えるのが妥当であろう。容器で容積の大きい大型の甕などは神崎港の調査では少ない。平成12年・13年（2000・2001）の緊急調査でもこのような器種は出土していない。帯金具や湖洲鏡などの服飾と関連する遺物等の出土はそれぞれ数例である。武器である太刀、槍、弓、矢、てつはう等の遺物は平成13年（2001）の緊急発掘調査でまとまって出土しているが、大量には発見されていない。引き続き緊急調査は平成14年度（2002）の夏には行なわれる予定であるので、武器類も昨年以上に出土する可能性

もある。平成６年に元位置で出土した大型の碇を含む３基の碇の近くでは竹索などのロープが出土している。碇頭を南側（沖側）に向けて海底に打ってあることと、ロープの方向も南北へ延びていることからこれらの出土状況考えるとこの碇の位置より北側、すなわち、陸地側に近い場所に船が停泊していたことを意味するものである。海底に打った錨と船の距離は船の全長の約３倍が船を安定させ、一定の場所に係留が可能であると言われている。３基の碇頭がすべて南側に向くということは停泊している船が風により碇と反対側、つまり、風下に強く押し流され碇とロープには負荷が掛かり、この負荷に耐えることができなくなるとロープが切断し、その結果、船が海岸に打ち上げられたり、座礁したり、あるいは、船同士が衝突して破壊されたりすると思われる。

神崎港海底の碇が出土した付近には当然複数の沈没した船が存在することが想定できる。神崎港海底調査で出土した遺物が沈没したこれらの船に積まれていたことも当然想定できる。そして、江南軍の船団船が神崎に停泊しているなかに東路軍の船や兵士が含まれていた。元軍の鷹島への上陸や船団の連絡などに東路軍の船が使用された可能性もある。江南軍の船団に管軍総把印を持つ役職を委任された中隊長は恐ら元軍の戦闘部隊を率いていた人物ではないかと現在のところ考えておきたい。

Summary

The underwater excavation of Kozaki harbor was a schedule for ten days and trial excavation of the survey area of 2 m×10 m. Because of short term and small area, it is difficult to look for many results. Eight artifacts have been found at the top of the 3rd stratum. One of them does not belong to the related object of the Mongolian fleet. The other objects such as one shard of blue celadon bowl, four shards, one nearly undamaged earthenware, and a bundle of arrows have been found. Though there is an example discovered by the rescue excavation of last year, during the campaign the arrows have been excavated under the condition that over seventy arrows came to be a rusted and harden bundle. Though X-rays photography has been used to see the inside condition, but it cannot be recognized clearly. It is proved that iron almost disappeared.

The archaeological campaign which carried out last year helps to understand the strata of the sediment of Kozaki harbor. To understanding the accumulation of the sediment, it will be useful and an important data for the archaeological excavations which will be carried out in future at Kozaki. An important and key stratum of the accumulation at Kozaki harbor could be grasped. The strata, which they should pay attention to in the accumulation strata, are the third stratum. This stratum includes relics related to the Mongol's invasion. The characteristic of this stratum is to contain the big sized shells in large quantities in the gray coarse sand stratum. This stratum is a comparatively hard sand stratum, and it confirms that relics related to the Mongol's invasion are found on the upper part of this sand stratum.

報告書抄録

ふりがな	たかしまかいていいせき
書名	鷹島海底遺跡Ⅵ
副書名	鷹島海底遺跡内容確認発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	鷹島町文化財調査報告書
シリーズ番号	第5集
編著者名	林田憲三・松尾昭子
編集機関	九州・沖縄水中考古学協会・鷹島町教育委員会
所在地	福岡市中央区天神4－5－10　チサンマンション第2天神1110 長崎県北松浦郡鷹島町神崎免146
発行年月日	2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鷹島海底遺跡（たかしまかいていいせき）	長崎県北松浦郡（ながさきけんきたまつうらぐん） 鷹島町地先公有（たかしまちょうちさきこうゆう） 水面（すいめん）	42387	20	33°25′	129°45′	2001.8.1 ～ 2001.8.10	20	遺跡の内容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鷹島海底遺跡	包蔵地	中世		・青磁 ・褐釉陶器 ・矢束	水深－9～－10m 発掘調査

鷹島海底遺跡Ⅵ

2002

発　行　鷹島町教育委員会
長崎県北松浦郡鷹島町神崎免146

印　刷　株式会社　昭　和　堂
長崎県諫早市長野町1007－2